

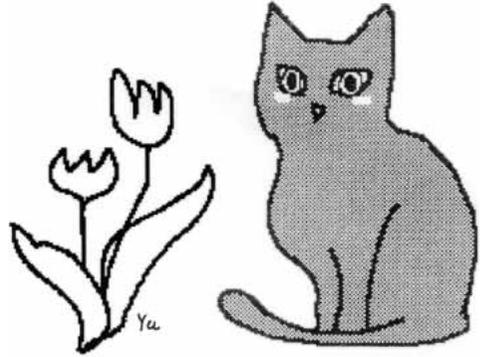


SINCE 1901 感謝と希望を
日本女子大学・創立100周年

図書館だより

目次

本を借りて読む		
貸し本屋から公共図書館へ(後篇)	出淵 敬子	1
「今、学生にすすめる本」特集(その4)		
吉中 哲子	平田 京子	2
増子 富美	渡邊 利雄	
西山 力也	鳥居登志子	3
山田 忠彰	国府田隆夫	
知っていますか? 図書館の使い方	中澤 恵子	4
カミュ『異邦人』を読んで	磯崎 清	6
『錦織』	野口 文恵	
目白図書館が“新”図書館だった頃	初山 紀子	7
図書館(目白)からのお知らせ		8
図書館(西生田)からのお知らせ		



本を借りて読む

-- 貸し本屋から公共図書館へ -- (後篇)

出淵 敬子

大規模経営に発展した貸し本屋ミュージアムや、鉄道の駅に支店を増やし車中読み物を提供して発展して行ったW・H・スミスが、イギリス小説に少なからぬ影響を与えたことも見逃せない。そのひとつは、19世紀のイギリス小説の特色である3巻本の発達である。オースティンモスコットも3巻本の形で作品を構成したが、これは出版主にも貸し本業者にも経済的に好都合な出版形態だった。高価な書籍を買えない読者たちはこの3巻本を借りて、本を次々に読むことができたのである。

もうひとつは、組合派のキリスト教信者であったミュージアムが、貸し本屋に置く本を『ミュージアム選書』と名づけて、ヴィクトリア時代の道徳観を外れないような本を選んだことである。とりわけ「若い女性向け標準書」として若い女性の道徳的感性を害わないような「良書」を勧め、彼の考える「悪書」を店から追放したことは注目に値する。これによって彼はいわゆるヴィクトリアニズムを擁護し、検閲めいたことをしたのだ。作者と出版主と読者の仲介役を果たしたミュージアムのような貸本業者が、出版のみならず本の構成や内容にまでも影響力を持っていたことは興味深い。

前篇でイギリス人は借りて読むほうが優勢で、日本人は買って読むほうを好むのではないかと書いたが、それでは日本には借りて読む習慣、つまり貸し本屋がなかったのかと言えば、そうではない。日本でも江戸時代から貸し本屋はあり、ミュージアムのように手広く経営した江戸の長門屋や名古屋の「大惣(大野屋惣八)」と呼ばれる貸し本業者が知られていた。貸し本屋が作者と版元を仲介する役を果たし、作品の形態や普及に影響を及ぼしていたこともイギリスと似ている。大惣は1767年の創業から150年にわたって書籍の収集を続け、蔵書数は数万冊といわれた。それらは後に国会図書館、京都大学、東京大学の図書館の蔵書となった。

そうしてみるとイギリスと日本の「借りる」「買う」の違いは、どこからきたのかという疑問には、公共図書館の発達の違いが影響したと考える方がよさそうだ。イギリスでは、1850年に初の図書館法案が制定され、世紀の後半には無料の公共図書館が各地に増えていった。貸し本屋の購読者たちが、次第に充実する無料の図書館サービスを楽しむようになっていったことは想像に難くない。日本では1899年図書館令が施行されたが、無料の図書館の実現は第二次大戦後であった。

(図書館長・英文学科教授)

「今、学生にすすめる本」特集（その4）

吉中哲子（食物学科教授）

ブリア・サヴァラン著（関根秀雄訳）『美味礼賛』 白水社 1996年（新装復刊）

30年も前にならうか最も感銘を覚えた一冊の本がこの「美味礼賛」である。洋酒菓子サヴァランの語源にもなっているフランスの食通ブリア・サヴァランが1825年に書いた古典であり、原表題は「味覚の生理学」である。彼は生理学、栄養学にも造詣が深く、おいしさをあくことなく追求した人である。その序アフォリズムに「禽獣はくらい、人間は食べる。教養ある人にして始めて食べ方を知る」「新しい御馳走の発見は人類の幸福にとって天体の発見以上のものである」と述べている。サヴァランは料理ないし食味の究極は単に贅沢なものではなく質素な食事にも満足でき、さらに社会、人類の幸福にまでつながるものと考えていた。この書は料理の哲学とも言える古典であるがテーマ別に区切られており非常に読みやすい。何度読んでもますますその深さに感じ入る書である。グルメブームといわれる今、是非一読されたい。

平田京子（住居学科講師）

普段は専門書以外本を読まない生活なのだが、学生の皆さんにお薦めする本は？と問われて私なりに考えてみた。人生の節目で「この本に出会ったのだ」と思えるような鮮烈さをもって心に残っている本がたった1つある。**辻邦生著『廻廊にて』**（新潮文庫 1973年）、これは私の人生の転機に偶然出会い、人生への絶望感を希望へと劇的に変えてくれた本である。ちょうど大学1年生の頃、サークルの先輩に「この本はとてもいい」といって勧められた本でもあった。最初のページがむずかしく次のページまでが特に遠く感じられるのだが、何かをつかみ取りたいときにぜひ読んでほしい。読み進めるうちに主人公の人生観について、心の底から熱くなるような感動を感じることができるだろう。作者は日本語文の名手と言われているそうだが、名文を味わい、その中に込められているメッセージについて耳を傾けるのなら、ぜひこの1冊を手にとってほしい。

増子富美（被服学科助教授）

青木生子著『近代史を拓いた女性たち 日本女子大学に学んだ人たち』 講談社 1990年

新入生の皆さんにはぜひ一読していただきたいと思い、この本を取り上げました。この本は教養特別講義で前学長である青木生子先生が本学創生期に学んだ11人の女性達 山川登美子、上代たの、平塚らいてう、丹下うめ、大村嘉代子、高村智恵子、宮沢トシ、網野菊、原口鶴子、高良とみ、茅野雅子 を取り上げ、講演された内容を1冊の本にまとめられたものです。2001年には百周年を迎える本学で、今から100年ほど前に創立者成瀬仁蔵先生より直接学んだ彼女達は、本学で何を学び、何を考え、その後の人生をいかに生きたのか。大学で学ぶことの意義が問われている今、彼女達の足跡に触れることは、私達に大きな示唆を与えてくれるでしょう。

渡邊利雄（英文学科教授）

司馬遼太郎著『アメリカ素描』 読売新聞社 1986年

最近、大学でも、異文化コミュニケーション、国際化論が話題になることが多いが、他国の歴史や文化を知ることはたいへん難しい。その中で、本書は「素描」どころか、内容が濃く、巷に氾濫する薄っぺらなアメリカ旅行記100冊以上の重みと魅力をもっている。合理性と機能性をもった普遍的な「文明」（人工国家アメリカ）と不合理で特殊な「文化」（日本）を対比させるという長年の思索と博識に基づく歴史家としての独自の視点と、生きた人間に対するあくことなき好奇心をもった小説家の柔軟でユーモラスな現代アメリカの描写。この2つが縦糸と横糸となってアメリカというものの原型を浮き彫りにする。そして、このアメリカを通して日本と私たち自身のことを考えさせる。アメリカ訪問は初めてで、しかも滞在は40日にも満たなかったというが、それでこれだけの内容。刊行後、時が経ってもまったく色あせていない。出色のアメリカ論として推奨したい。

西山力也(史学科教授)

昨年ヴァイマルのゲーテ生誕250周年祭で地元紙からインタビューを受けたさい、「ゲーテは日本では読まれなくなりました」と答えたところ、大そう驚いていました。というのも、日本は明治以来ゲーテ受容の優等生として通っていたからです。流行はどうあれ、ゲーテは今でも読む価値のある作家で、どれか一つ推薦するならば、やはり『若きウェルテルの悩み』(岩波文庫)です。出版と共に世界的なベストセラーとなり、これ一冊でドイツ文学は世界の舞台に躍り出ました。青春の恋の喜びと苦悩、陶酔と絶望を描いた小説で、ウェルテルの情熱が向けられる女性ロッテは日本でも製菓会社の名前にもなっているほどです。また、『親和力』(岩波文庫)も併読すると良いでしょう。姦通小説などと言われるこの作品も、人間関係の微妙さ、危うさという観点から読んでみるとじつに興味深く、時代や国の違いを越えて今でも私たちに語りかける、まさに叢智の書です。

鳥居登志子(心理学教授)

渡辺憲著『認識とパタン』岩波新書 1978年

例えば目の前にいる動物を指して、「これは何?」と問われたとき、私たちは他ならぬ犬として認識します。本書では、この犬のように「ある類似性をもつ集団(類)の一員としての個体」がパタンであり、その個体を犬という類にあてはめることをパタン認識であると規定しています。

著者は、こうしたパタン認識を思考の共通基盤と位置付け、このような観念が現れてきた科学的・哲学的な文脈を記述した上で、先の「類」の抽出は何によって可能になるのか、という問題を心理学や神経生理学、数学などの諸分野に触れながら考察するのです。その後で、コンピューターによるパタン認識技術の可能性と限界という困難な問題の解明に、確かな事実(当時としては)と極めて平易な言葉によって、挑戦しています。

勿論、約20年前の初版時と比べて雲泥の差がある今日の技術水準を考えると、コンピューターによるパタン認識に関する記述には、実情に合わないこともあるでしょう。しかし、その場合にもパタン認識という技術を可能にしようとして辿った思考の道筋には、事実としての重さを感じます。

山田忠彰(文化学科教授)

電子メディアの発達とリンクした現代の若者の活字離れが指摘されて久しいが、この現象の孕む問題性が実は奥深いものであることを考えさせるのが、B・サンダースの『本が死ぬところ暴力が生まれる』(新曜社 1998年)である。識字文化(これも問題を抱えてはいるのだが)によって「内化されたテキスト」として形成された内省的自己を、現在の電子文化が崩壊させ、人間が変容しつつあり、そこから、無感情な暴力に走る者たちが生まれている、とみるサンダースは、この自己の取り戻しにとって、識字文化の根源である口承(物語)文化の経験の意味を再考することが重要だというのである。この経験への回帰が容易ではないとしても、現在の電腦社会を浮遊する危うさをも少しでも感じる時があるのなら、「第二の誕生が、真の再生がはじまる」とローマで記したゲーテの『イタリア紀行 上,中,下』(岩波文庫その他)に盛られた彼の体験の旅物語を聞いてみてはいかがだろうか。

国府田隆夫(数物科学科教授)

渡辺一夫の随想集 注[1]注[2];(学者たちの研究が)“...何のために用いられるべきかを忘れたら、...《針の先へ天使が何人乗れるか》ということ議論しただけにとどまる中世の愚劣な神学者と何等選ぶところはなくなります。そして、このような学究に対しては、それはキリスト[人間たること]と何の関係があるか?と問われるのが当然となります。...しかし、こうした問いを、誰かが常に発していなければならず、これがヒューマニストの使命なのではないかと思っています。”(注[2], p. 141)この2冊を勧める理由は上文に尽きる。そのほか、古今東西の知者百人の言葉の抄録 注[3], 自然界の進化について科学者たちが語る美しく楽しい物語 注[4]を勧めたい。

注[1]『渡辺一夫評論選: 狂気について』岩波文庫; [2]『ちくま日本文学全集 第58 渡辺一夫』, [3]中村雄二郎著『人類知抄百家言』朝日新聞社, [4]ユベール・リーヴズほか著『世界でいちばん美しい物語: 宇宙・生命・人類』筑摩書房]

知っていますか？ 図書館の使い方

新入生の皆さん・入学して×年経つけれど図書館に親しんでいない皆さん、こんにちは。
「大学図書館は専門書ばかりでしょう。試験の時期しか使わないわ」などと言っている、そのあなた！！それはあまりにもったいないし、危険です。

確かに、大学図書館は大学の研究を支援するための図書館なので、蔵書の大部分は専門書になります。しかし！！それだけの理由で足が遠のいていると、いざ鎌倉（注ココでは試験のこと）の時は、館員をも巻き込んで大パニック状態…。しかも、往々にして「もう少し早く相談してくれていたら、間に合っていたのに…」ということになっています。

そのような事態を避けるためにも、ちょっと時間がある時に、図書館へ足を運んでみましょう。

ダメ・ダメ・ダメ！

- ・図書館に入館する際には、携帯電話・PHSの電源を切ることをお忘れなく！！
- ・図書館内では飲食も禁止です（図書館資料は水に弱いし、食べかすを求めて集まったゴの字にかじられてしまうことも…）。

皆さんが煩惱に負けた時、騒音公害や資料破壊が始まるのです☹



ウォーミング・アップ：「図書館のご案内」を読んでみよう。

「図書館のご案内」には、『図書館のしおり』目白版・西生田版と『図書館利用案内』目白版4種類・西生田版5種類とがあります。次に『図書館利用案内』9種類を紹介しましょう。

- 『日本女子大学図書館利用案内 目白 貸出と西生田相互利用』 『 図書の探し方』
- 『 雑誌と1階施設』 『 レファレンス・サービス(参考係)』 『日本女子大学西生田図書館利用案内 1 貸出・施設・目白の図書館の利用』 『 2 図書の探し方』
- 『 2 - 2 図書のさがし方』 『 3 逐次刊行物とAVコーナー』 『 4 参考係(レファレンス・サービス)』

新入生の方はオリエンテーションの時に配付されたものがお手元にあるかと思います。

ステップ1：図書館にはどんな施設があるのかな？

ブラウジング・コーナー 新聞（当日の朝刊と前日の夕刊）や情報誌（ぴあやオレンジページなど）が置いてあります。英語・中国語・韓国語の新聞もあります。1人暮らしの人にはとっても便利！ただし、図書館ではお・静・か・に。

共同研究室（目白）・グループ研究室（西生田） 図書館資料を使って、グループで学習・研究する部屋です。た・だ・し、図書館施設なのだから、飲食は厳禁！！

AVコーナー ビデオ・カセットテープ・CDなどの図書館所蔵の資料・持参資料の再生（ダビング不可）ができます。

ステップ2：「図書の貸出」ここにご注意！

利用カードの交付 貸出には利用カードが必要です。学生証を持参の上、カウンターへレッツ・ゴー。図書館ライフのスタートですが、ここで一つ注意！利用カードは本人のみ有効です。

知っ得情報

本学の学生なら所属学部に関係なく、目白・西生田両方の図書館を使えます。
利用カードも共通です。両館の資料は直接借りることも、取り寄せることもできます。

貸出 図書と利用カードをカウンターまでお持ち下さい。貸出冊数・期間は掲示などで確認して下さい。詳しくは『図書館利用案内（目白）（西生田）』を読んで下さい。

- ・継続：図書を引き続き利用したい時は、返却期限までに図書と利用カードをカウンターへ持参して下さい。電話による申し込みは受け付けません。また、貸出停止中の場合や予約がついている場合は継続できません。
- ・予約：貸出中の図書は予約ができます。カウンターに申し出て下さい。

ダメ・ダメ・ダメ！

1日でも！1冊でも！返却の遅れている図書があると、新たな貸出ができません。図書を延滞すると、延滞した日数分だけ貸出停止になります。《最重要チェック項目》

- ・貸出手続きの済んでいない図書を館外に持ち出そうとするとアラームになります。
- ・貸出は必ず本人がすること！利用カードのまた貸しはトラブルの原因になります。図書の延滞罰則・弁償はすべて利用カード本人の責任になるので、ご注意。

ステップ3：図書を探そう！

本学の図書館は開架式です。自由に書架に行って資料を探して下さい。

探している資料が本学に所蔵されているかどうか、所蔵されている場合その配架場所はどこか、正確に知るには目録で調べることが必要です。目録にはOPAC(Online Public Access Catalog, コンピュータ検索)があり、本学の蔵書を調べることができます。詳しくは『図書館利用案内（目白）（西生田）』を読んで下さい。コレはなかなか優れたもの。ただし下記の収録範囲を目安に探して下さい。

<OPAC(コンピュータ検索)で探せる資料>

- ・西生田地区の全蔵書
- ・目白地区の蔵書の1990年4月以降に受け入れのもの(1990年3月以前に受け入れた目白地区の蔵書については順次データ入力中です)
- ・雑誌(和・洋)
*OPACでは和書、洋書、雑誌の区別なく探せます。

OPACにはPC(パソコン)とVT(専用端末)の2種あります。PCではインターネットの本学図書館ホームページが見られます。メニューの「蔵書検索」で本学所蔵資料の検索ができます。メニューには他に「利用案内」「開館日程」「Online Journal」「学外サーバ」「日本女子大学」があります。より有効に活用するためにも、図書館で開催するOPAC講習会に参加することをお勧めします。ちなみに無料です。あ・と・は、失敗を恐れず何度でもトライ！

OPACで探している資料が見つからない場合、目白を利用している方はカード目録をひいて下さい。西生田を利用している方は参考係に相談して下さい。目白で所蔵している資料かどうか調べます。『図書館利用案内（目白）（西生田）』もあわせて読んで下さい。

ラストステップ：扉を開けて

以上、駆け足で図書館の初歩的な使い方を説明しました。図書館をどう生かすかは皆さん次第。さあ、これを読み終えたら扉を開けて お待ちしています！（館員・西生田図書館 中澤恵子）

カミュ『異邦人』を読んで

磯崎 渚

この本は、私が高校二年生の時初めて読んだ本であるが、大学生となった今再び読んでみると、一味違った見方もできる。

『異邦人』は最初から異様な書き出しである。主人公ムルソーの母であるママンの死から始まるのだが、彼が悲しみにひたったり、涙を流している様子もない。このことが後に彼がおこした事件に深く関わってくることになるのだが。

ムルソーは、友人のレエモンの「女性問題」に係わり、殺人事件をおこした。しかしこの殺人も彼の特別な意思でやったという感じはなく、殺人を犯した後も、後悔するのではなくうんざりしているという態度をとっているのだ。彼の裁判では、母親の埋葬の時に涙を流さなかったことが大きな理由となり、死刑となったのである。この本の主題は不条理の理論である。このために処刑されるというのはやはり不条理であるが、彼の態度はあまりにも否定的である。ムルソーは結局処刑されるが、自分が幸福であったと悟っている。自分が孤独でないことを感じるために、処刑の日に大勢の見物人が集まり、憎悪の叫びをあげて自分を迎えてくれることを望んでいる。

最初から最後まで、主人公の人物像を追っていくうちに、ムルソーが考えていることもまちがったことは言っていないということに気付いた。もちろん行動に関しては常識に反したこともしているが、この本は、不条理に関し、不条理に抗して作られた古典的作品と言われていることにはうなずける。外国文学は、日本とは伝統、文化、考え方などがう点もあって難しい文章も多いけれどもとても興味深く読むことができる。またこのような名作に出会えたらぜひ読んでみたい。

(家政経済学科2年次学生)

『錦繡』

野口 文恵

『錦繡』は、男女二人の手紙のやりとりが文章となっている。その手紙のやりとりから二人がかつて夫婦であったこと、男が別の女性と心中事件を起こして別れ、十年後に偶然再会したことなどが、読み進めていくうちにわかる。そして、手紙のやりとりを重ねていくことによって、お互いの過去を見つめ直し、自分たちのこれからの未来へと踏み出して行く。

本の中に「業」という言葉が何度か出てくる。私は、説明できないような深く重い言葉であるなど感じながら読んでいた。当たり前であるが、人生経験を積んでいない私にとっては、怖いとさえ感じたほどだ。二人にも「業」というものがあり、それを認めた上で前に進もうとする強さに驚かされる。その強い姿勢をもつのも、男の心中事件で生死を彷徨ったこと、女はモーツァルトの音楽から生きることと死ぬことを感じとり、再婚してから授かった障害を持つ子の母であるといったことがあるからだと思う。

二人は最後のそれぞれの手紙で、お互いの幸せを願いながら手紙のやりとりを終える。きっとそれからの二人は、幸せに人生を送ったと思う。恋愛感情を超えた、友情にも似た強い絆で結ばれた者同士だと思うし、自分の幸せを願ってくれている人がいるという心強さから、前を見て歩いていったと思いたい。いつの日か二人が再会してほしいと思うのである。

感想文を書く前にも、何度もこの本を読んでいた。自分と主人公との接点から感情を入れて読む本もあったが、自分から遠くに存在していると感じるこの本に引き込まれてしまう。そして、読む度ごとに目に留まる箇所があり、また、読む度ごとに違った箇所に目が留まるのである。だから、新しい本を読む時と同様に新鮮に感じるのだ。不思議だと思う。私はこれからも、『錦繡』を読み続けるだろう。

宮本輝著『錦繡』

(社会福祉学科2年次学生)

目白図書館が“新”図書館だった頃

初山 紀子

図書館の大型本の棚にある卒業アルバム（昭和38年度）の中に、『閲覧室』とわずかに名札が見える建物をバックにした12人の集合写真がある。キャプションは「図書部」となっている。12人は当時の主事（教授）と図書館の仕事をしてきた人達である。今は、私を除いて、誰もも在籍して居られない。4人の方は鬼籍に入られた。何故今この写真をとりあげるのかということ、目白の現図書館が出来る直前の、旧館最後の年の姿を記録するものだからで、私個人にとっては、その後37年間勤めることになる日本女子大学図書館に就職した最初の年だったからである。当時の図書館（というより、正直なところ、図書室といった方がふさわしかった）は、現在の樟溪館1階の化学実験室のある部分と、香雪館1階の樟溪館寄りにあった平屋建ての閲覧室を、渡り廊下で結んだスペースが全部であった。樟溪館の中に、事務室と閉架書庫があり、板張りの廊下の一番奥に、冬は冷え冷えとする洋書のReading roomがあつて、閲覧係の担当者1人が、ぼつんと番をしていた。香雪館側の建物には、参考図書と貸し出しカウンターがあり、その奥は、大きな机がずらっと並ぶだだっ広い閲覧室になっていた。東側の窓際には、和図書の書架が配置されていた。勿論冷房など無く、夏場は、折角の化粧も崩れるまま、日暮れには、哀れな痕跡を残すだけになってしまった。冬は冬で、早番にあたり、大きな石油ストーブに、これ又大きなドラム缶から、ポンプで給油することで一日が始まった。早く暖まりたいと焦って、灯油を床にこぼし、往生したこともある。こういう環境だったから、私の顔には不満と戸惑いが浮かんでいたのだろう。篠崎主事から「失望しないで下さい。来年は素晴らしい図書館が建ちますから」といわれた覚えがある。独立の建物もない当時の状況で、『図書館』という看板も、どこにも見当らなかつたように思う。前述の写真の背景の『図書閲覧室』とある所が正面玄関と考えられる。反対側の壁には、開閉館時間が掲示してあつた。図書館長という呼び名もなく、トップは図書館主事といわれていた。全ては翌年に完成される60周年記念図書館までお預けということだったのだろう。新図書館については、上代学長の下、学内の委員会で熱心な検討が重ねられていたようだ。新入りの私は、仕事に慣れるのに精一杯だったが、時折先輩達が、紅潮した顔で激しく意見を闘わず姿から、これから大変なことが始まるらしいと予感していた。新図書館への引越し準備から開館まで、館内の空気は、日を追って沸騰していった。10人余りの館員は、忙しく動き廻りながら、時にぶつかり合つて、混沌とし、議論もしていた。管理職はなく、自ずから経験の豊かな先輩が中心となつてはいたが、平等の雰囲気が強かつた。ぎりぎりの人数で、全員に仕事が割り振られ、一人一人が自分の分担に責任を持つより仕方がなかつた。出来る限りのことをやって、開館を迎えた日には、連日の肉体労働の後でもあり、くたくただった記憶がある。新図書館は、夢のように立派だった。Xerox コピーもコンピューターもない時代だったが、冷暖房完備、全開架で、木製の書架やカードケースは、利用者の使い易い高さを考えた特注だった。色彩にも細かい配慮がなされ、いわば、手作りの心地よい空間が出来上つていたと思う。キャンパスの中心に位置する図書館が花形だった幸せな時代といえるだろう。そこに至るまでの苦労と努力の詳細については、中核となられた先達の方々のみがご存知であり、私には語る資格がない。最終段階に新参者として加わり、新図書館誕生に立ち会う貴重な体験をさせていただいた。新しいものはやがて古くなる。今再び“新”図書館への願いが強い。状況は厳しい。図書館のIdentityを求めて、館員の心が一つになることだ。困難はある。忍耐強く、誇りを持って、図書館魂を貫いて欲しい。私は決して、古めかしい精神主義者ではないつもりだが、心の問題の大切さを改めて感じている。折しも、私の大好きなラグビーはシーズンたけなわ。心の在り様が勝敗を分けるゲームを幾つも観た。去るにあたり、ラグビースピリットを表わすといわれる簡潔な言葉を贈りたい。

“One for all, All for one” これでノーサイド。

（館員・洋書係）

図書館（目白）からのお知らせ

雑誌記事索引の検索方法がわかります

インターネットのNICHIGAI/WEBサービス[雑誌記事検索ファイル]の検索方法は4月からかわります。「学外サーバー」のオンライン情報検索のメニューに入り、今までのようにID、パスワードを入力する必要がなくなります。ただし、館内（目白）の特定のパソコン4台（2階3台、1階1台）での利用となります。

OPACネットワークプリンターの利用時間を延長します

平成12年4月より、次のとおりOPAC（パソコン）ネットワークプリンターの利用時間を延長します。料金（1枚10円）、利用範囲（資料検索データ）は従来どおりです。

利用時間 月 - 金 9:00 ~ 18:30 土 9:00 ~ 14:30

ケミカルアブストラクトの利用時間を延長します

洋雑誌「Chemical abstracts」は、平成11年1月よりCD-ROM版「CA on CD」で購入しています。利用の申込みは1階カウンター（雑誌フロア）で受け付け、1階フロアのパソコンでご利用になれます。利用時間について、平成12年4月より閉館15分前まで延長します。

学外サーバ オンライン情報検索 のリンクが増えました

・国立婦人教育会館（HP）：国立婦人教育会館が収集している女性及び家族に関する様々な情報のデータベース検索システム

・婦人教育情報センターwww.OPAC

もちろん西生田図書館でも検索できます。

2000年問題対応のコンピュータ調整が無事終了しました

平成11年11月13日（土）に臨時閉館して、2000年問題対応のコンピュータ調整を実施いたしました。利用者の皆さまにはご迷惑をおかけしましたが、おかげさまで問題なく2000年を迎えることができました。

図書館（西生田）からのお知らせ

雑誌記事索引の検索方法がわかります

雑誌記事索引（国立国会図書館編）の最近のものは、CD-ROM版で検索できましたが、4月よりインターネットのNICHIGAI/WEBサービス[雑誌記事検索ファイル]の検索方法にかかります。「学外サーバー」のオンライン情報検索のメニューに入ります。ただし、館内（西生田）の特定のパソコン3台での利用となります。

2000年問題対応のコンピュータ調整が無事終了しました

平成11年11月13日（土）に9:10～12:00の短縮閉館をして、2000年問題対応のコンピュータ調整を実施いたしました。利用者の皆さまにはご迷惑をおかけしましたが、おかげさまで問題なく2000年を迎えることができました。

編集後記 今年も卒業生を送り、新入生を迎える季節となりました。新入生の皆さん、図書館を大いに活用して大学生活を過ごしてくださいね。巻頭のカットは、西生田図書館で勤務している小山裕子さんによる。西生田キャンパス正門あたりでよく見かける猫ちゃんが可愛くて、描かれたとのこと。春の訪れは、もうそこまで来ています。図書館だより編集委員：田口令子、中島和子、陸川享子、田代陽子、中澤恵子（田口）